

帝国の没落と「もうひとつの世界」への道筋を探る(上)

— ブッシェ政権の終末を目前にして —

武藤一羊

◆ 頂点からの転落

二期にわたるブッシェ政権の八年間が終わりに近づくにつれ、二世紀初頭の最初の一時期が一巡し、世界が次の季節に移ろうとしていることが感じられる。世界を厚く覆っていた氷はいくつもの大きい氷塊に分かれ、そこに生じた亀裂には海面がのぞき、場所によっては海水は激しく噴出している。氷塊はにぶい音をたて、大きいエネルギーをもつてぶつかり合いつつ、相互の位置関係を変えつつある。それらがどのような次の図柄に落ち着くかは、決定されていない。しかしそれを最終的に決めるのは、大海の力であろう。亀裂は、海水が下から大きく動き、わきあがり、次の図柄の出現に影響を与える環境を創り出しているのだ。

振り返ってみると、アメリカ帝国は9・11事件の衝撃をバネとして、その政治的世界支配力を頂点に押し上げたのである。二〇〇一年九月、ブッシェ政権は、国内の刑事事件として扱うのが相当の「テロ攻撃」に、アフガニスタン

という他国への全面的軍事攻撃で応えた。そして、初めは「報復戦争」のちに「反テロ戦争」と名づけたこの侵略戦争にほとんどすべての国家を動員することに成功した。ブッシェは「アメリカにつくかテロリストにつくか」中間の道はないと、各国を恫喝し、NATOは集団的自衛権を發動して参戦、NATOとロシアは共同声明を発してアメリカを支持した。小泉政権もいちはやく米国の戦争支持をぶち上げた。このときアメリカは、テロリストとの戦争という、敵のありかも勝利の形も明らかでない一方的軍事行動にほぼ全世界を動員することに成功したのである。グローバル帝国としてのアメリカの頂点到達はこのように記録されたのである。

半世紀近く続いた二〇世紀の冷戦期、世界はアメリカ「自由世界」帝国とソ連帝国によって分割されていた。そのソ連帝国が崩壊してアメリカは遅ればせながらグローバル帝国の座についた。そして一九九〇年代なかば、クリントン政権の下でようやくグローバル戦略を打ち出した。それは

アメリカの覇権へのいかなる挑戦者の出現も許さない「全領域にわたる支配・優位」の確保というものだった。この要求は米民主導の「反テロ戦争」へのほぼすべての国家の動員によって、実現されたのである。だがそこが頂点だったことにブッシェとその政権は気づいていなかった。「E」成功に思い上がったブッシェ政権は得意満面、妄想に属する「ネオコン」の世界戦略と哲学に導かれつつ、また石油資源の支配という私利私益をそこに重ねあわせつつ、サダム・フセインのイラクにまったく根拠のない言いがかりをつけて、イラクへの侵略戦争を強行した。この段階で、9・11への対応で結集することのできた国家連合は分裂した。こじつけの戦争理由を、フランス、ドイツ、ロシア、中国は受け入れず、国連決議は通らず、千万人を超す人びとが反戦デモで街頭に出た。

この戦争を合理化するために、ブッシェ政権が二〇〇二年に宣言した「ブッシェ・ドクトリン」は、わずか数年前の文書なのに、いま読み返してみると、完全に色あせ、その大言壮語は空虚にしか響かない。「米国はいまや世界中で、前代未聞の、そして比肩するものがない、力と影響力を所有している」と謳いあげるこのドクトリンは、米国の世界支配の特権を恥ずかしげもなく主張していた。アメリカが「悪の枢軸」と名づける国家にたいして先制攻撃をかける権利を宣言したばかりでなく、「自由と民主主義と

自由企業」のモデルを「すべての社会に適用されなければ

ならない」とする途方もない、空想的な世界改造を謳いあげるものであった。サダムの圧制からの解放をねがうイラク国民は歓呼して米軍を迎え、民主イラクの建設にとりかかり、中東の米国流民主化の拠点となる——そしてむしろ米国は中東の資源を確実に支配できる、ブッシェやラムズフェルドやチェイニーはそう本気で信じていたふしがある。

だが二〇〇八年のいまこの野心的な企てはどうなったか。現状を見れば明らかである。企てはことごとく失敗したのである。アフガニスタンでは、打倒したはずのタリバンが復活し、米国とNATOによる「不朽の自由作戦」——日本海軍は海上で参加——はむしろ激しさをまして続き、軍閥は依然として地方を支配し、カルザイ政権はカブールを支配するだけだと伝えられている。自由も解放もここには存在しない。イラクについては多言を差し控える。いまだに続いているこの侵略がどれだけ恥知らずで犯罪的なものか、イラク社会と中東の関係をどれだけ破壊し、破壊し続けているか、どれだけの死と荒廃をもたらしたかについて、要約することはとうていできないからである。そしてイラクに打ち込まれた米国の杭を支えに、シオニスト・イスラエルが、罰せられることなしに、パレスチナ民衆にどのような犯罪的仕打ちを続けているかについても同様である。

ブッシェのアメリカは、六年前の勇ましいドクトリンを

推進する元気を完全に失っている。他方、この惨憺たる失敗から抜け出すすべをもたない。ではこの帝国支配は、頂点を過ぎたなかで、どこへ向かうのであろうか。われわれはどのような時期を生きようとしているのだろうか。

◆アメリカ帝国の実像と仮象

アメリカ帝国の解体と没落の時期——それが私たちが入り込んだ時間である。だがそれは、ドイツと日本の敗戦によって一気に覇権交代が画された第二次大戦後の状況とは異なっている。アメリカ帝国が直ちに次の覇権——たとえばEU、中国など——によって取って代わられるわけではないのである。アメリカ帝国の解体と没落とはそれ自身かなり長期にわたるプロセスとして、それ自身ひとつの歴史的时代を形作ると考えなければならぬ。この没落期において、アメリカ合衆国は、帝国の座から降りようともしないし、でももしないまま、没落していき、そのことが人類社会にいつその混乱と苦痛をもたらすような作用するであろう。そしてこのプロセスの中から資本主義による世界編成をどのように、だれが始末するかという大問題がいやおうなしに表面に迫り出してくるにちがいない。

だがこの時代を見通すためには、アメリカ帝国とは何かをもう一度振り返る必要がある。私は、アメリカ帝国は、ソ連の崩壊後をはじめ、第二次大戦直後に夢見て実現でき

なかったグローバル帝国となったのだと論じてきた。アメリカの覇権は、先行する覇権国イギリスが植民地帝国であったのと異なり、国境のカベを越えて世界全体をまるごと非公式な支配領域として包摂するグローバルな性格を備えていたことが特徴であった。ブレトンウッズ体制下の基軸通貨としてのドルの特権は、戦後の米国が国民国家であるままで帝国として機能することの制度的確認であった。だが、それでも前述のように、アメリカは真にグローバルな帝国として機能することはできなかった。ソ連の敵対と中国革命の勝利がそれを阻み、冷戦により世界は分割され、アメリカ帝国は半分の帝国にとどまったのである。版図という点からいえば、一九九〇年代初めソ連が崩壊すること、アメリカ帝国は遅ればせながら、その支配領域を全世界に広げたのである。

金融市場にあふれる天文学的な額のドルは、米国も含めた国家のコントロールを脱して、ボールドレスに新たな投機機会に殺到し、実体経済と人びとの生活を無慈悲に破壊するようになったのである。それは新自由主義的（ネオリベラル）グローバル化と呼ばれるプロセスの帰結であった。

今日の世界にはグローバルな権力が存在し、何百万、何億という人びとの運命にかかわる重大な決定が行われている。世界政府のようなものは存在していないし、単一のセンターもない。しかしそこにはさまざまな権力が結びつき、収束して作り出される事実上のグローバルな決定メカニズムが存在し、矛盾や対立を内部で調整しつつ、世界をあるひとつの方向へ引きずって行っているのは明白である。中枢部国家群（G8）から、WTOのような国際機関、国家エリート、多国籍企業、金融資本、支配的メディア、体制的知識人にいたる膨大な数の各種のアクターが複雑に相互関係を織り成しつつ、複合的な巨大権力、非公式な誰にも責任を負わない権力が成立しているのである。これはハートとネグリが、ネットワーク権力としての「帝国」と呼んだものに近い。このグローバル権力は、競争による無制限の資本蓄積を社会の組織原理とする「市場原理主義」にしたがって経済のグローバル化を急速に推進してきた。ネグリらはこの「帝国」をアメリカ合衆国と関連付けることを

拒んでいるが、それは無理な議論である。帝国は、アメリカ合衆国の似姿でつくりだされたものであるとともに、アメリカ合衆国をその不可欠の特権的構成部分とする権力である。逆に、米国が帝国でいられるのは、アメリカ国家がグローバルな資本主義的支配諸集団の集合的利益をまがりなりにも代表しうるかぎりである。なかでも、その比肩するものがない圧倒的軍事力がアメリカを置き換え不可能な要素としていたのである。ここではアメリカ帝国は一個二重の性格をもつて現れる。それは国民国家アメリカ合衆国を超えたグローバル権力の機関であると同時に、最大の帝国主義国家としてのアメリカ合衆国という国民国家でもある。9・11後の状況でこの二重の存在は、一時ひとつに融合させられたかに見えた。国民国家米国がそのまま帝国として現れ、承認されたかのような仮象である。ブッシュとネオコンは、この仮象を实体化し、アメリカ合衆国をそのまま特権的な帝国として制度化しようと試み、その前提の上にイラク侵略戦争を実行した。だがその結果、登り詰めた頂点から滑り落ち始めたのである。

◆一時代と二つの帝国没落期

そこでどのような光景が展開することになったか。そこにはアメリカ帝国の没落期の深刻な症状が顕著にあらわれている。そのいくつかをあげてみよう。

第一にイラク、アフガニスタン戦争が完全に泥沼化し、パレスチナ問題を焦点とする中東危機が出口を失って深刻化している。ブッシュによって開始された「反テロ戦争」全体は収拾の見通しのつかない状態に陥っている。

第二に、その結果、米国の相対的地位が低下し、米国の盟主とする反テロ同盟はほぼ解体し、米国をふくむ大国間および複数の国家連合間の暗闘が激化しつつある。米国をそのまま帝国と見せかけていた仮象は消滅し、米国はむき出しの一国の利害で他の巨大パワーと向き合わなければならなくなった（米中間、EU・NATOとロシア、米・インドと中国、米・日と中国、米とEUなど）。ただし、急速に経済膨張をとげた中国がグローバル覇権挑戦への野心を抱いている可能性はあるにせよ、まだ米国後の覇権をめざす直接の闘争が開始されたとみなすことはできないであろう。アメリカ帝国の後に、別の一国権力に担保された帝国が生じうるかどうかは、まだ未知数であるが、私は米国が最後の国家ベースのヘゲモンとなるだろうと予想している。

第三に、覇権がらみの闘争と部分的に重なり合いつつ新興経済大国連合BRICS（ブラジル、ロシア、インド、中国、南アフリカ）が国際経済における政治決定プロセスに有力なアクターとして登場するとともに、北側の市場開放を求める南の国家連合であるグループ21が出現した。ア

フリカ諸国を中心とする最貧国もそこに結集した結果、これらの国家の集団的力で、世界貿易機関（WTO）のカンクン会議で北側の提案を葬り、WTOを機能麻痺に追い込んだのである。

第四に、中南米で反米左翼政権と中道左派政権がドミニカの誕生し、それとキューバとの連携が強化され、さらに、米国の提唱する米州自由市場に対抗するメルコスール（MERCOSUR、南米南部共同市場）など自立的共同市場への試みが活発化している。

第五に、「新自由主義」グローバル化、すなわち今日の世界資本主義が、その破壊的な帰結を逃れようなく世界社会全体に突きつけ始めた。世界と一国内の貧富の格差、温暖化をふくめた環境破壊、そして何より、世界的な過剰ドルによる投機とその破綻による実体経済と民衆生活の大規模な破壊がもたらされている。環境危機と食糧危機とがアグリビジネスと投機資本の手で操作され、結び付けられている今日の状況は、地球社会がすでにグローバル資本主義を許容しえなくなっていることの端的な表れである。

第六に、ブッシュ政権のもたらした惨憺たる状況にたいするゆれ戻しの力がアメリカ国内にも強まりつつあり、それが一月大統領選に向けて民主党候補指名獲得のためのヒラリー・クリントン、バラク・オバマの大衆獲得競争という形をとって展開している。この競い合いの帰結はまだ

予断を許さない上、一月選挙で「米軍は一〇〇年でもイラクに留まるだろう」と豪語するマケインが負けるとは限っていない。だが、帝国の破綻のなかで、アメリカ社会に何か新しいものが起こりつつあることも確かである。「ワシントンを変えよう！」（日本なら「水田町を変えよう！」）と呼びかけるオバマ選挙キャンペーンが、行き詰まったアメリカ社会のなかに、若者を中心に草の根からの自発的な盛り上がりと呼び起こしていることに注目する必要がある。

第七に、米国のグローバル軍事の再編と構築は、基本的に新政権の政策に相対的に独自のリズムで推進されるだろう。地盤沈下する米国にとって、地球的軍事力とその行使への意思とは、減退する影響力を埋め合わせる唯一の領域だからである。軍事力への依存はいっそう強まり、その軍事能力は際限なく自己増殖し、宇宙空間を含めた歯止めない軍事技術開発と兵器システム配備が自己目的化され、経済の軍事産業への中毒症的な依存が恒常化し、社会はいっそう軍事化される。

◆グローバルな社会運動——これからの世界へ

このような状況の展開は没落期の帝国支配の新しい目鼻立ちを示し始めたのである。問題は、動き始めたこの状況にどのような下からがっぷり組み合い、介入するか、そし

て帝国支配とともに今日のグローバル資本主義をくつがえし、「もうひとつの世界」を創造するかにある。ここでは、帝国支配の（遅すぎた）絶頂期——そこでは敵味方への分極化ではないにせよ、敵の焦点化が容易であった——におけるのはちがういっそう能動的なアプローチが必要となるであろう。

むしろ私たちは帝国支配を内部から亀裂させつつある既存の権力要素のどれかにたよって「もうひとつの世界」を展望することができない。（中華帝国の支配もしくはEU要塞の世界支配などが想像できようか）。そうであれば、それはピープルと呼ぼうとマルティチユードと呼ぼうと、多様・異質な厚みのある民衆が、「もうひとつの世界」をもたらず力としてその内部・相互関係を組みなおすこと、そしてみずから「もうひとつの世界になる」ことの追求にほかならない。この見通しをユートピアンな夢と退けることは、二つの現実を目をふさぐことでしかできない。ひとつは、帝国「グローバル資本主義パラダイムの明白な破産」という事実、破産にもかかわらずそれを死守しようとする緊密につながりあった人びとの存在であり、もうひとつは、この破産の破壊的結果にたちむかい、侵害を正し、生活や自然や価値をまもり、新たに創り出そうとするおびただしい人びととその努力の存在である。

だがこの対抗軸は所与のものではない。民衆は多様な現

実的、想像上の利害で分断され、対立させられた上、逆に重層的な抑圧、搾取の關係のなかに結び合わされて、それを基盤に各種の排他的イデオロギーが集団間の衝突を挑発している。グローバル帝国＝資本主義と「もうひとつの世界」を志向する民衆のせめぎあい結実するのは、自動的に決まるのではなくて、社会運動という集合的な実践の介入によって左右される歴史のプロセスである。

過去一〇年ほどの間に、対抗軸を画するグローバルな社会運動が出現してきたことは明らかである。一九九四年一月、NAFTAの発効に合わせてメキシコのチアパスで蜂起したサパティスタの運動は「権力奪取をめざさない」とするその独特のメッセージによって、グローバルな社会変革運動を志すものに社会の底辺から強い衝撃と刺激を与える先駆者であった。そして一九九九年、シアトルで開かれた世界貿易機関(WTO)の閣僚会議を包囲した労働組合から農民運動、女性運動、環境団体にいたる多様な集団のデモは、内部の第三世界政府代表の抵抗と結果において連動しつつ、この会議を流会に追い込み、「市場原理主義」の攻勢に最初の大打撃を与えたのである。

二〇〇一年、ブラジルのポルト・アレグレで生まれた世界社会フォーラム(WSF)は新自由主義的グローバリゼーションに対抗するシアトル以後の諸運動のもっとも代表的な結集であろう。そこには、「もうひとつの世界は可能

だ」というスローガンの下、おそろしく多様で異質なおびただしい社会集団の人びと、ことなつた目標をかかげ、多様なイッシュユにとりくみ、異なつた行動様式をもつ人びとが、物理的に身を運び、時間と空間を共有し、任意に結びつきをつくり、行動を示し合い、議論し、行動計画をたてる。私が参加したのは十数万人が集まつた二〇〇四年のムンバイWSFだけであるが、少なくともそこでは、「もうひとつの世界」は可能であるだけでなく、その広大な会場を満たし、声をあげる民衆の渦としてそこに存在することが実感された。それはふつうに「世界」として表象されるものとは別の世界、すなわち「もうひとつの世界」を表していたからである。

しかしそこからどこへ進むか。もうひとつの世界の実在を、大結集によって相互に確認することは、それ自身が重要な行動である。WSFはそのための空間(スペース)を共同でつくりだす。この場において、数百もの自発的な会議、協議、合意が行われ、それぞれ参加者の責任において行動・運動に移される。WSFそれ自身は全体の承認を要求する宣言や声明を採択しないという原則が厳格に守られてきた。WSFは運動ではなく、空間(スペース)であるという自己定義である。だがやがて帝国の戦争と新自由主義的グローバリゼーションと効果的に闘うためにはそれが必要なのか、グローバルな民衆運動を創り出すことが必要

なのではないか、という声があげられるようになる。WSFが二〇〇一年ポルト・アレグレから二〇〇七年ケニアのナイロビまでの歩みを経るなかで、さまざまな矛盾と問題点があらわになり、表面化してきた。これは避けられないし、むしろ当然であった。これらの問題点のいくつかは、本誌三八号の特集「岐路に立つオルタ・グローバルゼーション運動」の小倉利丸論文「閉ざされた『自由な空間』から社会的空間のオルタナティブへ」で分析されているので、それに譲ろう。小倉が引用しているWSFの創始者の一人チコ・ウイケタルは「空間」かそれとも「運動」か、それを厳密な二者択一として提出し、「どんな犠牲を払っても、空間としてのフォーラムの継続性を確実にすること、現在あるいは将来においてさえ、フォーラムを〔運動〕へ移行させる誘惑を生み出さないことが肝要」であると主張するのである〔2〕。

WSFはいまのところ最大の結集の場であるけれど、唯一の場ではない。ここで問題なのは、WSFの中からあれ外部であれ、アメリカ帝国の衰退と没落という歴史的時期において、帝国とグローバル資本主義をくつがえすグローバルな民衆運動がどのようなものとして生成しうるか、その展開をうながしうるかということなのである。次回にその問題に光を当ててみることにしよう。

【注】

〔1〕アントニオ・ネグリとマイケル・ハートの『帝国——グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』(水島一憲他訳、以文社)の帝国理論に私はなかなば同意するが、米国の組み込みについてのほか、いくつかの批判点がある。私自身の帝国についての見方については、「アメリカ帝国と(グローバル化)の歴史的位相」(拙著「アメリカ帝国と戦後日本国家の解体」(社会評論社、二〇〇六、所収)を見てほしい。

〔2〕世界社会フォーラムの理念、成り立ちについては、「もうひとつの世界は可能だ——世界社会フォーラムとグローバル化への民衆のオリタナティブ」(編者・ウィリアム・フィッシャー、トーマス・ボニア、監修・加藤哲郎、監訳・大屋定晴他、日本評論社、二〇〇三年)を参照。WSFの今後の方向をめぐる論争については「世界社会フォーラム——帝国への挑戦」(ジャイ・セン他編、武藤一羊、小倉利丸、戸田清、大屋定晴監訳、作品社、二〇〇五年)が多様な論者の見解を編集、収録している。二〇〇七年のナイロビでのWSFについては本誌三八号が特集している。

(むとう いちよう/ピープルズ・プラン研究所運営委員)